

---

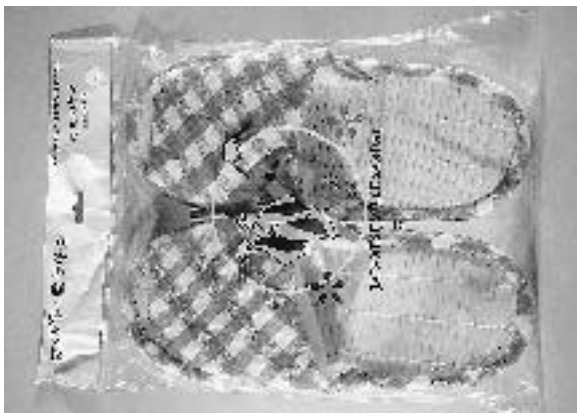
## スリッパ

日本はきもの博物館学芸員 武知邦博

---

### ■スリッパの国籍

私が日本はきもの博物館に勤めてから、旧来の知人は旅行の土産にその土地のはきものをくれるようになった。大変ありがたいことで、感謝しているのだが、先日香港旅行の土産とって、現地の露店で売られていたというスリッパ【1】をもらった。そのスリッパ自体は特に珍しくもない物だが、パッケージされているビニール袋に興味を引かれた。それには、富士山、桜、そして着物を着た女性がデザインされている。その他にも、「JAPANESE STYLE SANDAL」「デラックスなテイイシユカバー」「花間の情事」など、中にはちょっとドキッとするような文句も印刷されている。アジアでは日本語がブームの国があるのはご存じの方も多いと思うが、「JAPANESE STYLE SANDAL」という表現はただ単にブームに便乗しただけではないだろう。



1. 香港土産のスリッパ

この足の甲を覆うだけのはきもの、スリッパが、現地では日本のはきものというイメージがあるのではないか。

ところが大多数の日本人には、スリッパが日本的なはきものという認識はない。一体スリッパはどこ国のはきものなのだろうか。

### ■文化摩擦の打開

現在、私たちにとってスリッパというはきものはとても身近なものである。家庭には便所や台所、そして個人のスリッパがあり、病院や旅館などの公共の施設にもある。特に、家庭ではスリッパのない家の方が今や少なくなっている。

そんなスリッパを日本ではじめて作ったのは、明治初年、東京で仕立屋を営んでいた徳野利三郎だと伝わる。当時はまさに開国の時代であり、近代化のために西洋人が来日していた。その頃の日本には今のホテルのような西洋的な宿舎は充分ではなく、旅籠や寺社が宿舎になった。ところが、西洋人にはシャワーの時やベッドの中以外に靴を脱ぐ習慣はなく、人前で靴を脱ぐなどということは考えられないことだった。結果、畳敷きの宿舎でも玄関で靴を脱がずに上がってしまう。これでは室内が汚れてしまうし、畳も痛んでしまう。この問題を解決するべく、西洋人からの注文を徳野が受けたのである。

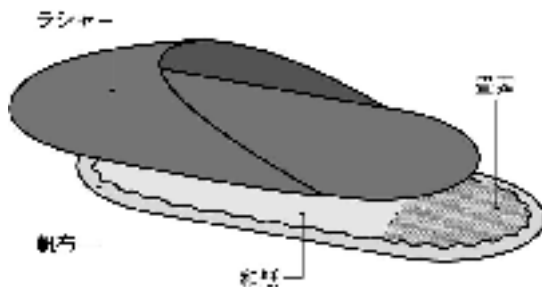
徳野利三郎の孫にあたる徳野康彦氏にこのスリッパについてたずねてみた。当時の



2. 戦時中の材料配給のための書類  
(徳野康彦氏所蔵・注1)

スリッパは現存していないが、伝え聞いているところでは、材料は甲にビロードやラシャが用いられ、台には古い畳表2~3枚を重ねたものに補強のための和紙を張り、さらに外底として帆布を張ったという【3】。その形状は草履のような小判形で、甲は現在のものより浅く、台の長さの後ろから1/3のあたりから立ち上がり、甲の頂点が台の前から1/3のあたりにあったという。

こうして作られたスリッパを、当時の西洋人達は靴のまま履いたという。スリッパ



3. 国産第1号スリッパ復元図 (注2)

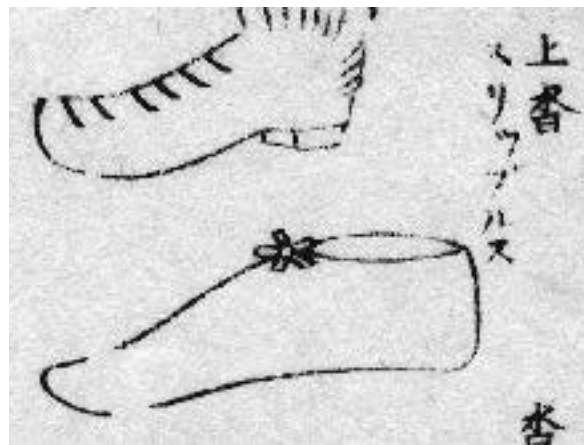
を部屋を汚さないためのオーバーシューズとして使用したのである。

文明開化の時代の“文化摩擦”ともなりかねない問題を、徳野利三郎は日本にある材料と技術をもって打開したのである。

### ■スリッパとslipper

福沢諭吉が慶応三年(1867)に著した『西洋衣食住』は、自らの渡航経験をもとに西洋の生活を紹介する書物であるが、これに「上沓」「スリッパルス」と併記されたはきものが紹介されている【4】。形は私たちがよく見るスリッパではなく靴である。

英語にもslipperという言葉があり、広く室内履きを表す。諭吉の紹介したはきものもslipperであるし、高いヒールがついた靴でさえslipperといわれているものもあり、シンデレラのガラスの靴は、grass slippersと呼ばれている。これらslipperの用途は、リラックスするためだったり、舞踏会用だったり様々であるが、室内履きであるという点は日本のスリッパと同じである。



4. 『西洋衣食住 完』  
(再摺版・慶應義塾中等部所蔵)

### ■太閤さんのスリッパ

京都市東山区の高台寺は、豊臣秀吉と北政所ねねにゆかりのある寺院である。ここに秀吉の所用と伝わる緋羅紗履【5】というはきものが所蔵されている。赤いラシャ



5. 緋羅紗履（高台寺所蔵）

に金糸で刺繍が施され、底も同じラシャである。また、左右は同型であり、台の形状は不踏の部分がくびれるひょうたん形をしている。現在のスリッパと比べると甲が非常に深いという違いはあるが、形状や底にもラシャが使われている点から判断すると、室内履きとして利用したものであろう。

ラシャを染める赤い染料は、スペインが原産という。また、金糸の刺繍は中近東の技術といわれる。太閤秀吉の所用として伝わる緋羅紗履は、なんとも興味深いスリッパである。

#### ■伝統の履き心地

さて、日本には上草履【6】というはきものが古くより存在する。上草履は室内用の草履である。形はわら草履などと同じだが、材料は竹の皮・イ草・蒲・布・和紙など他種類であり、多くはわら以外の素材で作られる。わらは丈夫だが使用によりわら



6. 竹皮草履（群馬県）

自体からくずが出るので、室内用に用いられることは少ないのである。使用は板の間などに限られ、畳の上で履かれないのは現在のスリッパと同じである。

この上草履をふくめて、草履を履いて歩く時と、靴とでは足の動きが異なる。ヒールの高くない靴で歩いた場合、踵から着地するが、この瞬間まで爪先は上に反り上がっている。一方の草履は靴よりも爪先の反り上がる角度は小さい。そして、この爪先のあまり反り上がらない草履の歩き方は、スリッパを履いた時に近いのである。さらに、履く時の動作も草履とスリッパは同じで、足の前半部を挿入するだけであり、履くことも脱ぐことも簡単である。この歴史的に履き慣れた感覚も、スリッパが日本人に一般的なはきものとなった理由であろう。

#### ■普及の過程

現在スリッパは、スリッパ専門のメーカーによって製造されている。しかし、明治中頃の櫻組造靴場カタログ【7】には「座敷靴」としてスリッパが革靴とともに掲載されている。カタログ中の（4）（5）はともに座敷靴と別記されているが（4）には踵を覆う部分がある。（4）は1円20銭～2円50銭、（5）は50銭～1円50銭と



7. 櫻組製靴場カタログ（稲川實氏所蔵）

価格も別記されている。参考までに靴の値段を紹介すると、(9)「ゴム入半靴」や(10)「鳶形半靴」はそれぞれ2円～4円であり、この頃は靴が高価なものであったのはよく知られているが、靴メーカーの櫻組が販売するスリッパもなかなか高価な商品である。

明治に日本で外国人のために作られたスリッパは、明治30年代になると都市の上層部を中心に履かれるようになっていくが、大正から昭和初期にかけての素材は、払い下げの軍服の生地を染色し直して使用していたという。

昭和になると八方ミシンが普及し、それまでの手縫いからミシン縫いへと製造の変化が生じる。昭和7～8年には、戦前ではスリッパ業界がもっとも栄えた時期を迎え、東京下町のスリッパ製造・卸業者は130～150人に増加をする。しかし、第二次世界大戦の影響により、昭和18年には各企業は存立できなくなる。戦後にはスリッパ業界も復興するが、戦中戦後のこの頃のスリッパは、台所や便所用と限られていた。素材も布以外にイ草など植物繊維で編まれたもの【8】もあった。

戦後の落ち着きを取り戻す昭和30年代頃になると、スリッパは進歩をはじめ。スポンジゴム、ビニールなどを底材として取り入れ、甲の布も生地、色、柄など豊かなものになっていった。そして用途も居間の



8. イ草スリッパ (昭和10年代後半)

来客用、個人用と広がりを見せ始める。そして、昭和40年代になるとマンションブームに板張りの居間が増え、スリッパの需要は伸びていく。また、西日本ではあまり聞かないが、中元・歳暮などの進物としてスリッパが贈られるようになったのもこの頃からのようだ。

その後、スリッパは高級品と廉価品の二極化の道をたどる。そして現在、スリッパははきものというよりインテリアの一部ととらえられている。(注3)

#### ■空飛ぶスリッパ

高度1万メートル上空を飛び交うスリッパがある。それは旅客機でサービスされるスリッパである。この空飛ぶスリッパこそ室内履きの文化の違いを表しているのである。

日本航空(以下JAL)のファーストクラスやビジネスクラスでは乗客にスリッパ【9】がサービスされる。



9. スリッパ (日本航空)

一方、イギリスのブリティッシュ・エアウェイズ(以下BA)のビジネスクラスに相当するクラブ・ワールドもスリッパのサービスはあるが、ファーストクラスではソックス【10】となっている。ソックスを機内履きにするのをためらう日本人は多いのではないかと同社にたずねてみたところ、やはりスリッパを望む日本人はおり、希望



10. ソックス (ブリティッシュ・エアウエイズ)

があればクラブ・ワールドのスリッパをサービスしているとのことであった。このスリッパに関して、同社は15年ほど前のテレビ番組(注4)で、日本人乗客の要望によりサービスをしているとコメントしている。

それではJALのスリッパは外国人に受け入れられるのかたずねると、おおむね好評であるが、ソックスを希望するヨーロッパ系の乗客もいるとのことであった。このJALのスリッパは履き心地や、足の大きな外国人も使用できるように大きさに留意して製造されているそうである。

ヨーロッパの航空会社は、ソックスを機内履きとしてサービスするケースが多いが、スリッパをサービスしている航空会社もある。それらもBAと同様に、日本人の要望によるものと想像できる。

地上のはきもの文化が空に反映しているのである。

#### ■おわりに

日本人みんなが靴を履くようになり、50年ほどの時間がすぎた。しかし、どれほどの人が正しく靴を履けるようになったのであろうか。履く瞬間から脱ぐ時のことを考え、横着な履き方をしている人はまだ多い。

スリッパというはきものは、日本人の生活に完全に溶け込んでいる。スリッパ業者

の努力があったことは言うまでもないが、いくら住環境や生活習慣が洋風化しても、家に帰るとはきものを脱ぐという習慣が残ったからである。靴文化は玄関という関を越えられなかったことに今日のスリッパの広まりがある。このような習慣は日本独自のものであり、序章で触れた香港土産のスリッパのパッケージに「JAPANESE STYLE SANDAL」と記されているのもうなずける。

スリッパは、そのリラックスできる履き心地や、床を傷めにくいという機能で世界に広がりつつあるのだ。

注1) 『企業許可令第七條ニ依ル事業報告書』

報告者は徳野康彦氏の父徳野明氏。「現ニ行フ事業」には「工業一九七履物(革製品及ゴム製品除ク)製造業 商業一一履物(靴ヲ除ク)卸賣業」となっている。また、「当該事業ヲ開始シタル時期」は「明治六年創立 明治四十四年二月相續ク」とし、浅草で事業を行っていた。

注2) 徳野康彦氏からの聞き取りより、作図する。

注3) 普及の過程は『創業者渡邊政雄と四十年史』を参考にしたところが大きい。

注4) 日本テレビ TVムック謎学の旅「日本人の珍発明・スリッパ<sup>秘</sup>発明」1988年5月放送

#### 参考文献

創業者渡邊政雄と四十年史編纂委員会『創業者渡邊政雄と四十年史』昭和62年、井草実業株式会社

福沢諭吉『西洋衣食住 完』再摺版、平成6年慶應義塾福澤研究センター・中等部

『日本人とすまい①靴脱ぎ KUTSU-NUGI』平成8年、リビングデザインセンター

潮田鐵雄『豊臣秀吉の緋羅紗履—日本最古のスリッパ—』「日本はきもの博物館・日本郷土玩具博物館97年度年報」平成10年、遺芳文化財